Ⅲ PCB取扱い婦人の子供の健康状況の追跡調査—健康診断結果（第3報）

原　一郎，平田　衛（大阪府立公衛研）
美濃　真（大阪医大，小児科）
原田　章（関西労働衛生技術センター）
木村真次（新日本電気）
遠藤　勉（遠藤病院）
梅田玄勝（北九州市民公害研究所）
奥村英彦（長崎大学，医，口腔外科）
財間至宏（大阪大学，医，衛生）

1. はじめに：コンデンサー工場でＰＣＢを取扱っていた婦人から生れた子供について，ＰＣＢの影響の有無を調べるための検診を，１９７５年から維続している。１９７８年までの報告はすでに行っているので，ここには，１９７９年の検診結果の大要を報告する。

調査時期および受診見数は，表１の如くである。第２回以後，受診者数が年ごとに減少していたので，今回は，以前に受診したことのある者に，経過観察の必要なことを強調して呼びかけた結果，受診者数を相当に回復することができた。

表１　子供検診受診者数

回	検診時期	世帯	子供数(男.女)	年令	受診回数 初，2，3，4，5
Ⅰ.	1975.11.22.	21	39(21,18)	3月—12才	39，
Ⅱ.	76.11. 7.	20	29(14,15)	3月—13才	9，20
Ⅲ.	77.11.13.	12	22(10,12)	8月—10才	2，6，14
Ⅳ.	78.11. 5.	7	13(5, 8)	2才—12才	0，4，1，9
Ⅴ.	79.11.11.	11	20(8,12)	3才—16才	1，3，6，3，7

2. 第５回こども検診結果（表２）

前回と同様の検診内容で実施した。受診児２０名中，血中ＰＣＢ濃度が10 ppb 以上の高値（最高２８ ppb）を示す子供が３人あったが，小児科学的および歯科学的診察によって，

ＰＣＢ中毒と判断すべき異常者は見出されなかった。歯科学的検診において，前回同様に，う歯の多い者，エナメル質形成不全，歯肉のごく軽度の色素沈着などは認められたが，いずれも血中ＰＣＢ濃度との関連は認められなかった。臨床検査においても，特別な異常は認められなかった。

3. むすび：以上の如く，第５回の検診でも，血中ＰＣＢ濃度の高い子供は見出されたが，ＰＣＢ中毒と判断される者はなかった。乳児期に認められた自覚症や軽度の変化も，成長が進むにつれ，ほとんど消えていっている。第１回以来，５年間の経過を個人別に，あるいは集団的に整理，検討する作業を実施中である。また，今後の経過観察の方法についての検討を行っている。

表２　第５回こども検診の結果１９７９．１１）

血中PCB濃度(ppb)	人数	爪変色沈着	皮膚乾燥	歯肉色素沈着	エナメル質形成不全	う歯 ＋	＋＋
３未満	６	１	４	４	３	０	１
３－４	５	０	３	３	２	１	４
５－９	６	０	３	５	４	０	１
１０以上	３	０	２	１	２	１	０
計	２０	１	１２	１３	１１	２	６

Ⅳ 児童の精神機能に対するＰＣＢの影響

佐藤俊子，松本和雄（大阪府立公衆衛生研究所）

１９６８年夏，北九州を中心として発生したＰＣＢ中毒事件は，油症についての厖大な医学的知見を提供した。

とりわけ小児の精神機能に関しても，いくつかの研究が報告された。山下は１３例に精神運動発達の遅れを指摘したが，山口らの報告には１例も認められず，顕著な精神障害をおこすとは考えられていなかった。

しかし，原田らは４才から１４才まで１２７名の児童について，６年間追跡した結果，多くの

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1.はじめに

コンデンサー工場でPCBを取扱っていた婦人から生れた子供について,PCBの影響の有無を調べるための検診を,1975年から維続している。1978年までの報告はすでに行っているので,ここには,1979年の検診結果の大要を報告する。

調査時期および受診見数は,表1の如くである。第2回以後,受診者数が年ごとに減少していたので,今回は,以前に受診したことのある者に,経過観察の必要なことを強調して呼びかけた結果,受診者数を相当に回復することができた。